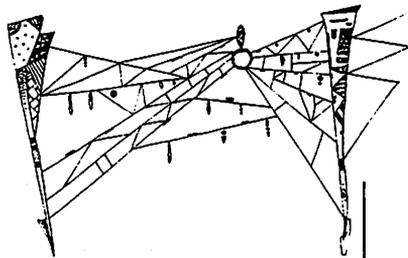


FORUM

フォーラム '90s



【特集】
この日本を
どうするか

【編集長インタビュー】公務監査に市民参加…韓国監査院長韓勝憲 2

【特集 この日本をどうするか】「オリーブの木」は根をおろすか?…松田博6 / 日本経済は再建できるか…降旗節雄9

「農の価値」の復権…丹野清秋12 / 日本国家を解体せよ…高良勉15 / 国破れて、山河さえなし…坂本進一郎18
年金・税金・賃金…家族単位から個人単位へ…水田珠枝20 / 東京法院失公道 戦犯鹿島罪不容…野添憲治22

フォーラム90s運営委員会から 24

コミンテルンとは何であったか…20世紀の政治思想と社会運動研究会…加藤哲郎25

自治体議員の日常生活…大嶋薫乃 / 私の問題意識…小川ルミ子 / 小畑精和 / 黒須純一郎 28

社会主義理論学会一〇周年記念研究集会 30

【国際連帯】封印された「謎」の解明…ソルゲ事件国際シンポジウム開催…白井久也 31

わが社の新刊・情況出版 / 実践社 34 / インフォメーション / 編集委員会から 36

1998
No. 5

コミンテルンとは何であったか

加藤 哲郎氏

七月一日に「二〇世紀の政治思想と社会運動」研究会の第三回として、加藤哲郎氏から「コミンテルンとは何であったか」というテーマで報告を受けた。

加藤氏は今年邦訳が出版された、マグダーマットル・アグニューの「コミンテルン史」(大月書店)の紹介から話を始めた。以下はその報告要旨である。

「コミンテルン史」(大月書店)は一九九五年に原本が刊行されているが、これまでのコミンテルン史関係の書籍と比べて、ソ連崩壊以後公開された新しい情報をもとに、客観的、歴史的にコミンテルンの歴史を追っているという特徴を持っている。

コミンテルンは最盛期には党の数で七〇を数え、党員数は三〇〇万から四〇〇万と想定される。ただしその半数はソ連共産党であり、資本主義国ではドイツ、チェコなど大きな共産党でも党員三〇万人程度であった。しかし、その国際政治への影響力は党の力量を超えて大きく広がっていた。

今日、ソ連崩壊後、西ヨーロッパにおいてコミンテルン型政党の後継者はポルトガルとアイルランドを除いて解散ないし崩壊してしまった。ラテンアメリカではいまだに一定の力を持っており、アジアでも存続しているが、経済政策のレベルで見

たときには開発独裁路線に対して非常に迎合的だとされる。

コミンテルンの特質は、労働者政党であるとともにプロレタリア独裁を掲げた革命政党であり、マルクス・レーニン主義に立脚するイデオロギー政党であり、かつ単一の世界党であった。それは「世界を設計する」という壮大な叙事詩を描いた党だった。

歴史的に見るならば、一九二〇年の「加入条件二一カ条」、二五年のモデル規約、そして二八年の「世界綱領」と、各国党の「ポリシェヴィキ化」を世界的に展開していった歩みの中に表現されている。

このコミンテルンの功罪については、各国の社会主義運動、共産主義運動の土台を形作ったという点と、ソ連の外交的道具になってしまったという点で総括されるのが普通だが、むしろ「全世界を設計する」という壮大な叙事詩」の中にふくまれていた問題点の総括が必要なのではないか。コミンテルンについては、ようやく膨大な資料が公開されて手に入るようになり、研究の条件ができたといえる。この研究の進展をぬきにしては、本来の意味での総括はできないだろう。

いまコミンテルン関係の資料はワンセットで一億五〇〇〇万

円ほどの値段で売りに出されている。日本では北大のスラブ研、早大、東大社研が購入したようだ。

その上で、モスクワで最近手に入れたアルヒーフ資料をもとに、ここではコミンテルン日本支部としての日本共産党の創立をめぐる問題について中心的に紹介したい。

公式の党史によれば党の結成は一九二二年七月一五日であり、同年一月―二月にコミンテルン大会でその報告が承認されて、プハーリンから綱領草案が示されたことになっている。そして一九二三年一月に第二回大会、同二月に臨時大会を開いて綱領草案を審議したが、「君主制の廃止」という項目をめぐって議論すること自体に反対という意見があり、議案には載せられなかった（審議未了）。一九二四年一月にはじめてコミンテルンの綱領問題資料集に掲載された―ここまでが公式の党史である。

しかし一九二二年七月一五日結成説は、一九二三年に当時の獄中中央委員会の討議により、党結成十周年を期して党の創立の日を明らかにする必要性から市川正一の法廷陳述によって初めて出されたものであった。

ただ党の創設の日としては一九二二年四月二十五日に準備会として作られたという通説があり、また三・一五、四・一六の裁判官だった宮城実が党結成の日を二二年九月五日とする説を出している。

コミンテルンに出した日本共産党からの報告文書によれば、一九二二年九月結成とされており、そこでは当時のアナ派とポ

ル派の対立の中で、プロレタリア独裁と労働者の政治行動の承認をもって党が作られたことになっている。書いたのは山川均で、総務幹事は荒畑寒村、国際幹事は堺利彦だった。

一九二三年のいわゆる石神井大会では、プロレタリア革命とブルジョア革命の関係、合法政党としての無産政党を作るべきか否かといったことが討議され、ここでは綱領草案審議は行われていない。「二三年テーゼ」は実は一九二三年後半以後にはじめてモスクワから出されたものであって、そこでの君主制廃止の要求に反対して堺、山川らが離れるという関係になっている。

生まれたばかりの日本共産党は、山川、堺、荒畑の党であり、ゆるやかな組織機構を持った「社会民主主義」的党であった。それがモスクワとの連絡が密になるにつれて組織性格が変わっていくことになった。一九二二年七月一五日結成説は、こうした「山川、堺、荒畑の党」としての性格を打ち消すという意図をもって徳田、市川らによって作られたものではないか。

加藤氏の報告は、最近モスクワで入手したアルヒーフ資料のコピーを使った興味深いものだった。討論の中では、「君主制廃止」という要求項目は有効だったかという石堂清倫氏の意見を軸に、対外侵略に動員されていた当時の国民的意識をどう変革していくかという観点に立った再検討が必要であるという意見などが提出された。